

批評と紹介

王明著

中国共産党の半世紀と

毛沢東の裏切り行為

本庄 比佐子

一九三〇年代前半の中国共産党を支配した「王明路線」の代表者である王明（陳紹禹）は、現在なお、というより文革以後はいっそう、党を誤った方向に導き党および中国革命に重大な損失をもたらした裏切り者の代表的人物として、激しい非難の対象にされている。その王明は、一九五六年の中共八大大会で中央委員に選出されたのを最後に久しく消息不明であったが、一九六九年三月カナダ共産党の機関紙『カナディア・トリビューン』に「中国——文化革命か反革命クーデターか」の一文を発表したことによって、かれがソ連で健在であることが明らかになった。王明は翌七〇年にも「レーニン、レーニン主義と中国革命」を発表し、これら二篇の論文はいずれも、文革と毛沢東路線が反社会主義的・反革命的路線であると断罪することによって、ソ連の中国攻撃の一翼を担っていた。このあと七一年から七四年ははじめまでに書いた四篇の論文を収録したのが本書で、最初の二篇は七一年の

批評と紹介 本庄

中共創立五十周年にあたって執筆されたが未公表のままおかれ、七四年になってその後の二篇を加えて一冊にまとめ上梓されたものである。しかし王明は本書の刊行を見ることなく七四年三月モスクワで客死したので、本書はかれの遺稿集であるともいえる。本書に収められた諸論文でも、毛沢東路線に対する非難・攻撃に変わりはないが、本書では、現在の中国の政治情勢を分析・批判することよりも、毛沢東路線の形成過程を歴史的に考察し、中国側の公式の中共党史に反論することに重点がおかれている。この点が本書をここで取上げる理由である。

最初に、各章の要旨を紹介しておこう。

一、「中国共産党の半世紀」

僅か八頁の短文で、中共五十年の歴史を二つの側面から概述する。すなわち、革命の事業に殉じて斃れた多数の人々をその名前を挙げて追悼すると同時に、毛沢東が行ってきた「犯罪行為」（裏切りと歴史の偽造）を指弾する。

二、「『整風運動』——『文化大革命』のリハーサル」

毛沢東が中共党内に独裁的地位を確立するうえで決定的役割を果たしたのが、一九四〇年代前半に行われた整風運動であるとの観点から、整風運動を發動した毛沢東の企図・政策、毛のとった措置、運動の実態などについて、王明自身の体験や王明と毛沢東との会谈の模様をまじえながら詳述してい

る。なかでも運動の過程で毛沢東が「反レーニン主義・反社会主義」の毛沢東主義を提起し、中共党史を毛沢東個人の勝利の歴史として「偽造」することを図ってこれに成功したと、換言すれば、毛沢東が整風運動をおこした目的はこの点にあったこと、に著者は毛非難の主眼を置いてゐる。

三、「文化大革命」と帝国主義に協力する毛沢東路線

毛沢東の内外政策の基本は反共・反ソ主義であり、それは毛が帝国主義（とくにアメリカ）に接近するためにとった政策であつたとし、その具体的事例として、一九三六年のスノウとの会談から近年の米中接近に至るまでの毛の帝国主義に「協力的な」言動を一四カ条にわたって列挙している。

四、「孤獨な道士」の運命と毛沢東主義の十全大会

中共十全大会は毛沢東が江青への権力委譲のために組織的準備を行ったものであり、批林批孔運動は毛がかれ自身の「専制君主」的な個人支配体制の維持を図つたものである、との観点から、近年の中国の政治情勢を論じている。とくに孔子批判と秦始皇再評価の問題に力点をおき、そのなかで始皇評価は歴史的事実と一致しないこと、魯迅の名前と作品を濫用・曲解していることを中心的論点にしている。

以上に見た四篇の論文のうち、第二の整風運動に関する章が本書の中心を成しているので、第二章を少し詳しくみながら若干の感想を述べてみたいと思う。

本章の内容は、大別すれば、(一)整風運動の経過、(二)運動の過程で出された毛沢東の主張に反論する形で、一九三〇～五〇年代初の中共党史に関する王明の側からのいくつかの事実説明、の二点にしぼることができる。そこでまず整風運動の経過であるが、王明の述べるところは、運動の方法や対象など基本的事実について既述の党史と大きく異なっていない。特徴的なことは、一九四二年二月に運動が始まる半年前から毛沢東が下工作を始めたとして、毛のとつた措置七点をあげ、そのなかでとくに毛が遵義会議の歴史を「偽造」しようとしたことおよび王明の毒殺を図つたことを詳述していることである。遵義会議については後述するとして、王明の毒殺未遂であるが、これは本書に先立ってソ連で出版されたウラジミロフ『延安日記』が最初に語つた話である。中国側は王明が仮病をつかつていたとしており、ほかに判断の材料がないのでにわかには真偽を確定することはできない。しかし病気の性質がいかなるものであつたにせよ、一九四一年一月以降、王明がたびたび入院生活を繰り返していた点は事実ではないかと思われる。

整風運動についてわれわれが問題にしなければならないのは王明の捉え方である。かれは、整風運動は毛沢東が党で唯一人の指導者になりたいという個人的野心から発動したものであり、毛が毛沢東主義を提起したのは指導者には他から打

倒されないうために「主義」が必要であると考えたからである、と述べる。そしてこのような権力欲に基いて毛がいかに「無法に」権力を行使して自らの路線の確立を図ったか、というのが王明の基本的観点である。実際、この運動において毛はかれに対立する王明ら国際派の路線を最終的に清算したのであるから、毛沢東路線形成の基点として運動を重視する王明の捉え方は事実になつていゝといえる。また、主たる

批判の対象にされて指導者の地位を追われた者が示す感情的反応としてみれば、王明の毛沢東非難も理解できないものではない。しかし、いかに毛沢東が強制的権力を行使しようとも、それだけでは黨員はうに及ばず広汎な一般大衆まで組織して抗日戦争を戦い、中国革命に勝利をもたらすことはできなかつたはずである。当時、日本軍の攻勢や国共関係の悪化によって辺区の経済的・軍事的情勢はきわめて厳しく、この困難を乗りきるために毛沢東は党の思想的統一と大衆動員を必要と考え、さらに整風運動とほぼ併行して生産運動をおこしたのであつたが、こうした辺区内外の情勢を王明がどうみていたかについては全くふれていない。またイデオロギーの問題として王明の説くのもつばら、毛沢東主義がいかにレーニン主義に反しているかについてである。だが、毛沢東路線の下で中国革命が勝利したことが明らかで現在において、毛沢東主義が反レーニン主義であるとの批判に終始する

ことにいかなる意味があるのだろうか。皮肉なことに、レーニン主義とコミンテルン路線とに基いて自らの正当性を主張する王明の記述自体が、毛沢東が王明を教条主義者として批判した理由をわれわれに納得させるといふ、著者の意図せぬ効果を生んでいる。

ところで、著者自身、「強調したいのは「運動」自体の遂行もさることながら、毛沢東が運動の過程で中国共産党史を偽造したこと」であると述べているように、著者の主張の重点は歴史事実の説明におかれてゐる。そのなかで最も重視しているのが遵義会議（一九三五年一月）の問題である。王明によれば、毛沢東は、遵義会議決議が六期五中全会（三四年一月）を部分的な戦術的誤りと評価しているのに対して、これを誤った党の政治路線であつたと書き改めるよう決議の修正を要求したという。そしてこれによつて毛は、五中全会路線が同全会を指導した博古（秦邦憲）の左翼日和見主義路線であり、さらには四中全会（三一年一月）が王明の左翼日和見主義路線であつたとの「異説」をたて、そこから遵義会議の決定的役割と毛沢東の功績とを導き出すことを意図した、と王明は述べる。この毛が主張したという捉え方による党史の記述は、王明も指摘するように、「若干の歴史問題に関する決議」（一九四五年四月）が最初である。この決議は、整風運動の過程で三〇年代前半の党の路線について検討と総括が

行われた結果であり、毛沢東の観点が受入れられたことの表われである。そしてそれ故にこそ、王明は整風運動期における毛の「歴史の偽造」を非難するのである。しかし、遵義會議決議を改めるといふ点では、現在われわれがみることのできる同會議の「第五次圍剿に反対する闘争についての総括決議」は博古らの軍事路線批判にとどまっており、王明のいう毛沢東の要求は通らなかつたことになる。仮に王明の述べたような毛の要求があつたとすれば、決議が修正されなかつたということから、党史の検討の際にかなり激しい抗争があつたことが想像されるし、また現在まで決議が公表されない事情の説明もつくのではないだろうか。

当然のことだろうが、王明は遵義會議の政治・軍事路線が誤りであるといひ、その具体的証拠に會議後の毛沢東の行動を例にあげている。第一は、施平（陳雲）「英雄的西征」とモスクワに來た陳雲から王明が聞いた話をを根拠に、毛沢東が「北上抗日」「抗日反蔣」のスローガンを捨てて貴州軍閥「王家烈を捕虜にする」ことのスローガンを掲げた点をあげる。しかし少くとも陳雲の論文からは抗日のスローガンの放棄は読取れない。王明は抗日のスローガンに共感したかもしれない地方軍閥をも蔣介石側にまわしたというが、当時抗日の路線は確立していたが実際の運用についてどれだけ具体化されていたかは疑問であり、むしろ王明の情勢把握自体にモ

スクワで中共指導部より早くから抗日救國路線を提起していたかれの希望的観測がはたらいっていないだろうか。第二は一九三五年六月の中央紅軍と第四方面軍との会師から兩軍分裂に至る経過である。この間の状況は判明していない点が多さまざまな記述がなされているが、本書は郭華倫『中共史論』の所説にもっとも近く、毛沢東は毛児蓋で突然分裂行動に出て一部紅軍を率いたのみで無断で北上していったと述べている。いずれにしろ遵義會議および長征の問題については王明は参加者ではなく他人から聞いた話に基づいていることを考慮せねばならない。

毛沢東の党史上における功績を否定する一方で、王明は抗日民族統一戦線政策に関する自らの功績を誇っている。かれの説に従えば、満州事変以後の抗日民族統一戦線結成についての指導はすべて王明に帰せられる。すなわち、対日作戦協定締結のための三条件を示した一九三三年一月の「中華ソヴィエト共和国臨時中央政府・労働紅軍革命軍事委員会宣言」、同じく三三年一月の満州省委への中共中央の書簡、三四年五月の中国民族武装自衛籌備委「中国人民対日作戦綱領」、および八・一宣言は王明が作成したという。これらはいずれも初期抗日民族統一戦線政策の基本的文書である。「若干の歴史問題に関する決議」とこれに基づく文革以前の中国側党史は、満州事変以後の博古ら党中央の路線が中日間の民族矛盾

の激化と中間階級の抗日要求とを理解しない極左の方針であったと批判すると同時に、右の諸文書については正しい政策として評価している。しかし、最近中国で出た史録『反对王明投降主義路線の闘争』は、王明のコミンテルン七回大会における報告を右翼日和見主義路線と規定し、その国防政府・抗日聯軍結成の提案を批判している。これは同趣旨の八・一宣言批判をも意味する。毛沢東の抗日路線が明確になるのは瓦窯堡会議（一九三五年二月）での報告からであり、現在の中国側文献はとくにこれ以後の毛の抗日路線については王明の路線と対照させて高く評価しているが、これ以前については必ずしも明らかではない。従来の研究では、初期抗日民族統一戦線政策について「反蔣抗日」が「逼蔣抗日」、「合作」へと変る政策転換を問題にすることが中心で、それらの政策にモスクワ（コミンテルン・王明）、中共中央、毛沢東がそれぞれどのような関係をもっていたかあるいはもっていないかといったか、三者の複雑なからみ合いを考慮に入れて検討することはあまり行われてこなかった。王明のいう事実、中国側が文革以後明らかにしつつある事実などを検討するなかで、満州事変以後の抗日民族統一戦線政策の発展の過程を捉えなおしてみる必要がないだろうか。

日中戦争期の抗日民族統一戦線については王明の「すべては統一戦線を通じて」という路線は、中国側から国民党への

降伏主義として批判されているが、王明は、この路線がコミンテルン書記長ディミトロフの勧告によるものであり、これに対する批判は一九三八年一〇月の六中全会ではじめて劉少奇から行われた、と述べている。だが、この点に関してあまり詳しい記述はなく、劉少奇は「すべては統一戦線を通じて」は「すべては蔣介石と閻錫山を通じて」に等しいから誤りであると述べた、というに止まる。六中全会で統一戦線内部での共産党の独立自主の問題をめぐる論戦があり結局毛沢東の路線が承認された、と中国側文献が述べるような状況については一言もしていない。だが、少くとも王明が国共の「両党委員会」および国民参政会の役割を高く評価してこの二つを統一戦線機関と認めていること、そして六中全会の途中で国民参政会に出席するために重慶へ向っていることなどは、かれが国民党との関係を重視していたことを示している。

一九四五年四月の六期七中全会で採択された「若干の歴史問題に関する決議」は、先にも述べたように、整風運動の総仕上げとして王明が重視するものである。かれはこの決議を、毛沢東が公然と中国共産党史を偽造した最初の文書であるという。しかし、文革後中国で明らかにされたところによれば本決議の起草には劉少奇が関係しており、かりに当時劉少奇が毛沢東の意をうけていたとしても劉の意図もまた挿入されている。だとすればこの決議の全内容についての「偽造」の

罪を毛沢東一人に負わせるのは疑問である。もし毛と劉の妥協の産物であるのなら、その点が明らかにされねばならないが、王明はまったくふれていない。また、決議は七中全会で採択されたものと『毛沢東選集』（一九五一年版）に収録されたものとは異なっており、後者はソ連を意識して書かれているという。四五年と五一年の中国の対ソ関係を考えれば、この修正はあり得ることであるが、この点にも劉少奇の意図の方がより強く働いていなかっただろうか。

以上のほかにも事実問題に関する細かな指摘はあるが省略する。ここにとりあげなかったが王明が多く頁を割いている問題に、毛沢東の「延安文芸座談会での講話」に関連して述べた一九二〇〜三〇年代の文学運動があるが、私はこの方面に門外漢であるのでやはり省略した。本書からは王明自身の事歴に関しても新たに知らされる点がいくつかあるが、そのうち、一九四〇年当時かれは党出版委員会主任であったという点、これによってかれが四〇年三月に『中共更加布爾塞維克化而闘争』第三版を出版し得た事情に説明がつくという意味で、注意を引いた。また、整風運動中に全員が書くことを強要された自己批判書を王明は最後まで書かなかったために、四九年一〇月の政治局会議と五〇年六月の七期三中全会で上申書の提出を迫る決議が採択されたとして、後者の「王明同志に関する中国共産党第七期三中全会の決議」の全

文を収録している。珍しい史料である。

以上にみたような王明のいう「事実」もまたかれの過去および執筆時点での政治的立場やさまざまな思惑を背景にしていることはいうまでもない。だが一方で、公認の党史もある時点で政治路線を基本的立場として書かれたものである。私は中国革命の勝利と毛沢東の果たした役割の大きさは十分に認めるにやぶさかではないが、同時に、そのうえでそれらができる限り正確な事実に基づいて歴史の中に位置づけることができる限り正確な事実からくる制約は大きくとも、そして本書は、その政治的性格からくる制約は大きくとも、そして利用のためには厳密な検討が必要であるけれども、なお今後の中共党史研究上の一つの参考材料になり得る多くの点を含んでいると考える。

本書は、第四章第三節を除いて、『王明回想録——中国共産党と毛沢東』と題して高田爾郎・浅野雄三両氏による日本語訳が出ているが（経済往来社）、誤訳が散見され、なかには文意が全く異ってしまう箇所があるので注意を要する。

(Вар Мун. История КПК и преобразование Мао Цзе-Дуня. Москва, Политгизлит, 1975.)